

Ⅲ 遺 構

西隆寺跡の発掘調査は、現在までに6次をかぞえ、寺域の各所を調査している。発掘遺構の記述は、主として発掘次数順におこなうが、同一遺構を異なる次数で調査したこともあり、この場合は一括して述べている。すなわち、1.東門地区として第1次調査を、2.塔地区として第2次と第6次調査を、3.金堂地区として第3次調査を、4.金堂南地区として第4次調査を、5.寺域西北地区として第5次調査をそれぞれまとめている。

1. 東門地区

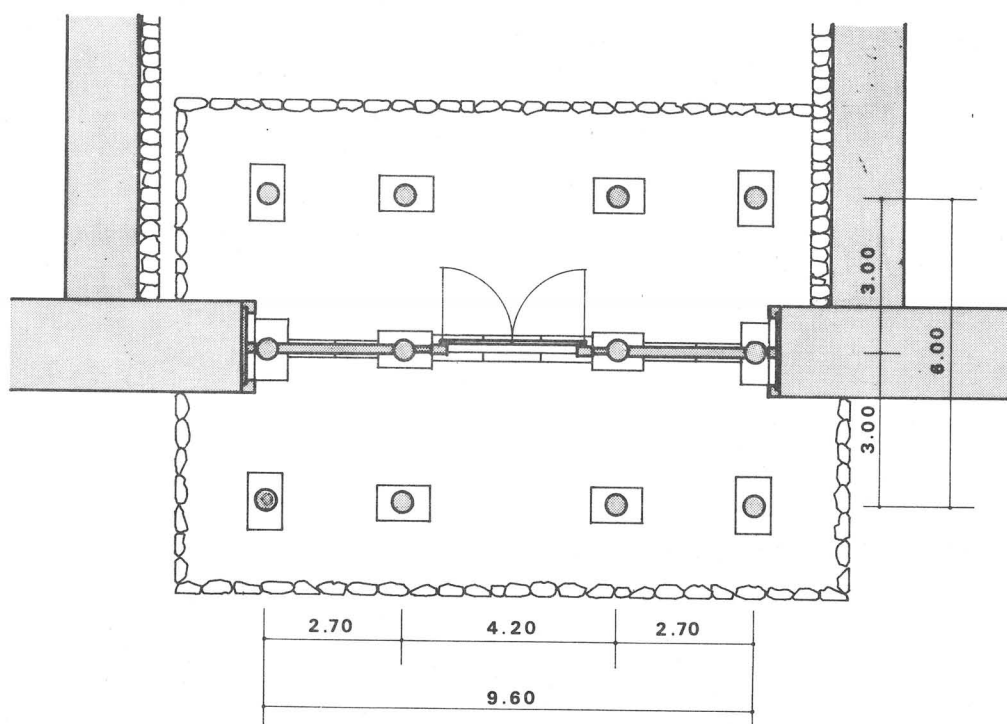
東門地区の発掘調査は、第1次調査でおこなった。検出した主たる遺構には東門1棟、築地3条、掘立柱建物3棟、溝2条、瓦敷舗道1、井戸1基などがある。

調査地域は、すでに建築工事のため水田面上に盛土がなされ平坦地となっていた。この盛土層は平均40cm前後の厚味をもっている。発掘地の土層は発掘区ごとに差がみられるが、もっとも顕著な遺構を認めた中央発掘区では、盛土層下に旧耕作土(厚20cm)があり、さらに砂質土の床土(2層に分けられ合計の厚さ35cm)が存在する。その下は秋篠川の影響をうけて砂質土や粘質土が複雑に堆積している。西隆寺関係の遺構は、黄褐色粘質土と灰色砂質土が互層に入り交った面で検出できた。この遺構検出面は水田面下約80cmに認められる。

東門 東門(SB001)は中央発掘区の東端で検出した。SB001は、秋篠川の氾濫によって東側柱列を失うが、他の礎石や地覆石が残存し、その規模を復原することができる。SB001の基壇は、わずかながらも掘込み地業がおこなわれており、25～35cmほど砂と粘土を交互にたたきしめて築成している。基壇四周の化粧は、花崗岩の自然石を並べた雨葛石のみの簡単なものである。基壇の大きさは、南北13.2m、東西9.6mであり、周囲に素掘りの雨落溝をもつ。雨落溝及び雨葛石は、基壇築成後に掘込み、据付けている。

建物は3間一戸の八脚門で、礎石は長辺112cm、短辺65cm、厚さ28cmの黄色あるいは緑色の凝灰岩製切石(転用材)である。妻柱列の礎石は長手方向を門の軸線と直角に、その他は軸線と平行にそろえて配している。礎石は基壇築成後に据付け穴を掘り根石を並べ、その上に置かれている。棟通りには礎石の他に黄色凝灰岩製の唐居敷がほぼ完存している。中央間北側の礎石は黄色凝灰岩製で礎石の中央に柱のあたりと思われる径50cmの円形のくぼみがみられる。また中央間南側の礎石は花崗岩製の自然石で、これに伴う唐居敷とともに据付け痕跡が2度あり、後に補修されたことが判る。唐居敷(116.8×47×34cm)には礎石に接する部分に方立の仕口穴(15×10×3cm)と、その脇に扉の軸擢穴(径6.8cm)が穿れている。北側の唐

Ⅲ 遺 構



第1図 東門復原平面図

居敷は原位置を動いており、礎石に接して抜取り穴が検出できた。移動した唐居敷をこの抜取り穴に据えつけると、北と南の仕口穴は逆で、南側の扉は内開き、北側は外開きとなる。おそらくこの唐居敷は他から転用されたもので、実際にはこの位置で使用されなかったものと考えられる。

建物柱間寸法は桁行側柱心々9.6m—中央間4.2m(14尺)、脇の間2.7m(9尺)、梁行側柱心心6m—各柱間3m(10尺)である。軒出は、基壇の出一桁行、梁行とも1.8m(6尺)—と雨落溝の位置から推定すると約2.1m(7尺)となる。また、隅の間の柱間寸法が桁行と梁行で1尺違い、屋根は切妻造本瓦葺であったとみられる。

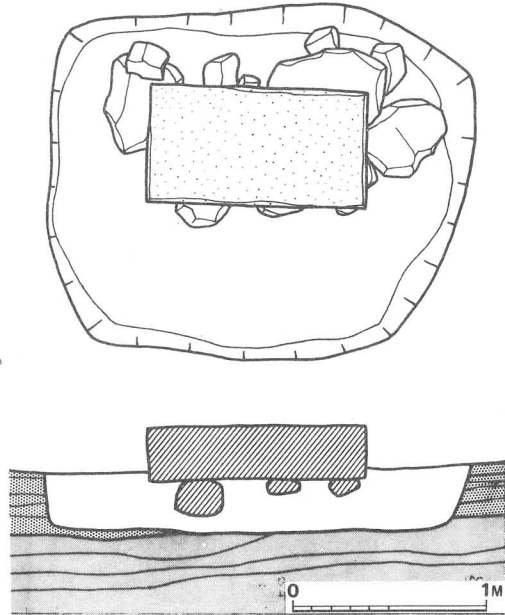
築地 調査によって東面築地1条と、寺内築地2条を検出した。SA002は、SB001の棟通りにつづく南北方向の築地で、寺域の東を限るものである。SB001の南側で検出したが、上部はすでに削平されており、わずかに基底部のみが残存していた。築地の基底部幅は1.8m(6尺)で、奈良時代前半の遺物を含む黒色土上に築かれた、砂と粘土の積土からなる。

SA003・004は、SB001の南北端付近から西へ伸びる瓦積基壇をとまなう寺内築地である。SA003はSB001の南妻柱列から南へ2.15m、SA004はSB001の北妻柱列から北へ1mの位置に瓦積前面を検出した。SA003の北側とSA004の南側には、平瓦(軒平瓦を部分的に含む)の木口積みを中心とする瓦積がみられる(第3・4図)。築地の基壇幅は、SA004でみると約2.25m(7.5尺)である。築地本体の基底部幅は1.65m(5.5尺)ほどで、南面の瓦積を含む約60cm

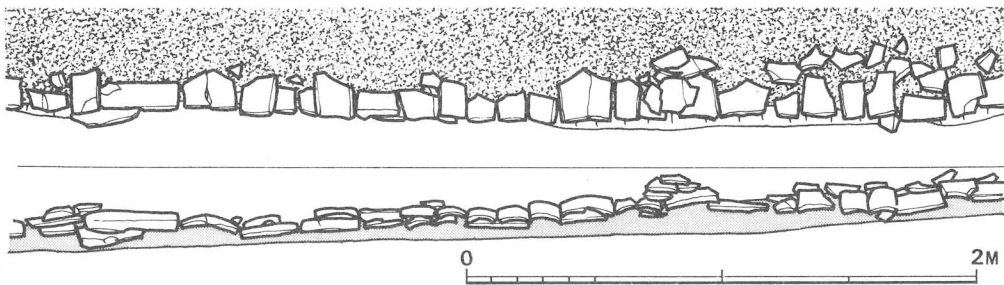
1. 東門地区

(2尺)の部分が大走りとなる。ただし、築地北側では大走りの存在が明確でなく、もし大走りが存在したとすると、築地基底幅がその分だけ狭くなる。SA003の規模については明確にできなかった。

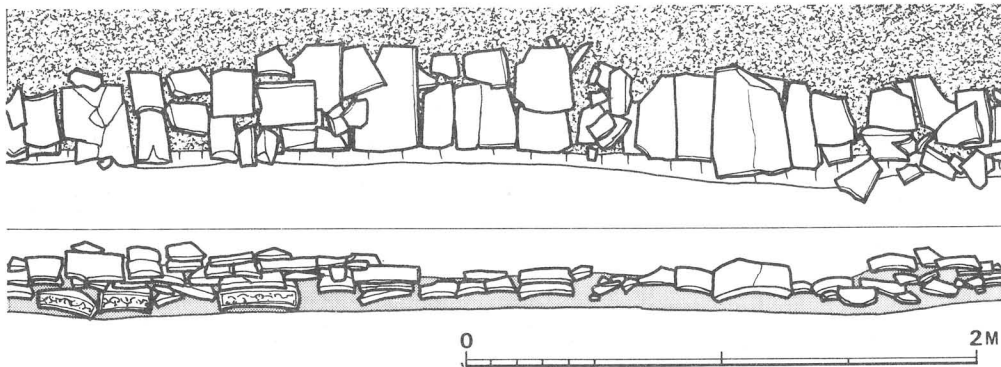
寺内道路 SF006は、SB001の中央から西へ伸びる幅約12.7mの寺内道路であり、南側と北側は、それぞれSA003とSA004で画されている。SF006には2時期の変遷がみられ、SF006Bの下面から瓦敷舗道をもつSF006Aを検出した。SF006Aの舗道は、SB001の中央線上に設けられた幅約1mの瓦敷面であり、後述するSD005付近では幅が広がられている。SF006BはSF006Aの上部に砂と粘土の互層(厚さ約30cm)を積みあげた道路で、瓦敷などの施設はともなわない。遺構の層位や舗装にもちいた軒平瓦などからSF006Aが、SB001の造営に伴うものであることがわかる。



第2図 東門礎石平面・断面図



第3図 SA003 寺内築地平面・断面図



第4図 SA004 寺内築地平面・断面図

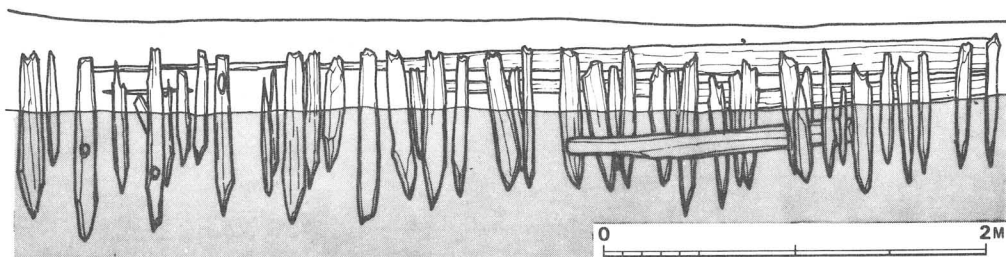
Ⅲ 遺 構

溝 SD 005は、SB 001の中軸線から西へ13.8m の位置に検出した溝であり、SF 006を横切って南北に走る。溝幅は1.0m、溝の両肩には護岸用の矢板が密に打込まれている。道路の中央部との交点5m には矢板にそわして横木が渡してあり、あるいはこの部分に橋が設置してあった可能性が考えられる。南北溝が寺内築地の下を潜る部分には暗渠がもうけられている。北側の暗渠には黄色凝灰岩製の側石と蓋石が残っていた。南側では黄色凝灰岩製の側石を検出したが蓋石は残存せず、また、側石の一部に花崗岩が混じって用いられている。

SD 005には、土層の観察などからみて(第6図)、3時期の変遷がみられる。前述した矢板と暗渠をとまなう溝は、最終の溝 (SD 005C) の状況である。内部には、灰色砂が堆積しており土器を含んでいる。それに先行するSD 005A・Bは、いずれもSD 005Cよりも一層下の土層から掘込まれた素掘りの溝である。SD 005Bは、幅約1.4m、深さ0.3mのもので、内部には灰黒色砂質土が堆積し、瓦や土器が入っていた。SD 005Aは、幅2.5m以上、深さ0.5mの溝であり、内部に黒灰色粘質土が堆積し、多くの土器が入っていた。SD 005A・Bは、後述するSX 033と重複関係にあり、SD 005AはSX 033よりも古く、SD 005BはSX 033より新しいことがわかる。SD 005Aは、遺構の重複関係や出土した土器の年代などからみて、西隆寺造営以前の溝と考えることができる。SD 005Bは、その両岸がSF 006Aと同一層位にあり、西隆寺創建当初の溝とみることができ。SD 005Cは、SF 006A・Bを埋めた整地層上面から掘込まれた溝であり、護岸用の矢板と暗渠をとまなっている。したがって、SD 005Bには暗渠がなく、SA 004もSD 005Cの時期に設けられたものであることが知られる。

SD 007は、SA 003の南側で検出した東西溝である。しかし、SA 003とは平行に掘られておらず、築地に伴う側溝と考えることはできない。おそらく西隆寺造営以前の溝と考えられる。SD 020は、中央発掘区西寄りで検出した南北に走る小溝である。

掘立柱建物 東門地区で3棟の掘立柱建物を検出した。他にも大小の柱穴を認めたが建物としてまともでなかった。SB 008は、中央発掘区南拡張区で検出した。4間×1間以上の南北棟建物である。柱間は桁行、梁行とも2.4m (8尺) 等間で妻柱列から東は秋篠川の氾濫で破壊されていた。側柱列北端の柱穴には柱根が残存していた。建物の方位はSB 001のそれと一致するが、柱穴から出土した土器の年代から平安時代初期の年代が推定でき、東門遺構



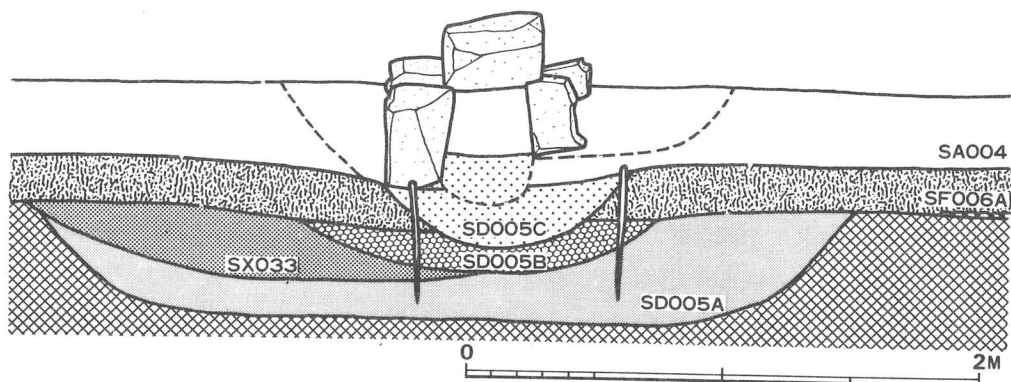
第5図 SD005 溝矢板列側面図

と直接関連するか否かは不明である。

SB009とSB011は南発掘区で検出した掘立柱建物である。SB009は4間以上×2間以上の東西棟建物で、柱間は桁行2.4m(8尺)、梁行1.8m(6尺)等間である。SB011は1間以上×3間の南北棟建物で、柱間は桁行2.7m(9尺)、梁行中央間2.7m(9尺)脇間2.1m(7尺)である。柱穴の重複関係からSB009の方が新しいことがわかる。SB009の内部には各柱筋にそろって床束の痕跡とみられる小柱穴があり、床張りの建物であると考えられる。2棟の建物は同じ方位をもち、SB001のそれに比して北で西へ振れている。両建物の造営年代は、奈良時代と考えられ、後述する井戸(SE010)によって柱穴が切られていることから西隆寺造営以前である可能性が大きい。

井戸 南発掘区西端北側で、井戸(SE010)1基を検出した。SE010は一辺5.70m角の掘りかたをもち、ほぼ中央部に井桁に組んだ井戸枠が残存する。枠木は長さ136.5cm、幅21cm、厚さ2.1cmの桧板で、10段目までを確認したが、さらにその下段は確認することができなかった。井戸内部からは、瓦・土器・木製品が出土し、SE010が奈良時代末頃から平安時代初頃まで存続したことがわかる。

木簡出土遺構 木簡を出土した遺構には、SX033とSX035がある。SX033は、SA004とSD005が交叉する位置に設けられた暗渠の下部から西方にかけて存在する遺構であり、層位的には、SD005B・Cよりも古く、SD005Aよりも新しいことが知られる。SX033には、黒褐色粘質土が堆積し、土器や瓦や木片などとともに木簡が出土した。SX035は、北発掘区東南隅で検出した遺構である。SX035には、桧皮を多量に含む黒色砂質土の堆積がみられ、土器や木製品などとともに木簡が出土した。SX033およびSX035の性格については、十分な調査が実施できなかったので不明な点が多い。遺物の出土状況やその内容などからみると、西隆寺造営にともなう廃材や不用品を投棄した土壌状の遺構とみることができよう。ただ、SX033の下部には西隆寺造営以前から存在したSD005Aがあり、造営時にその周辺が溝状の窪地を呈し、そこに木簡などの遺物を投棄した遺構であるかも知れない。そうすると、SX033と



第6図 SD005 溝・SX033 土層図

Ⅲ 遺 構

SX035は、溝状を呈する同一の遺構である可能性も大きい。

その他の遺構 SB001の下層には、溝状の遺構（SX036）がある。SX036には黒色土の堆積がみられ、奈良時代前半の土器が多数入っていた。SD005AやSA002の下部にみられた黒色土のように、西隆寺関係の遺構面下には、西隆寺造営以前の遺構が存在するものとみられる。しかし、今回の調査では期間などの問題もあり、下層遺構まで検討することができなかった。

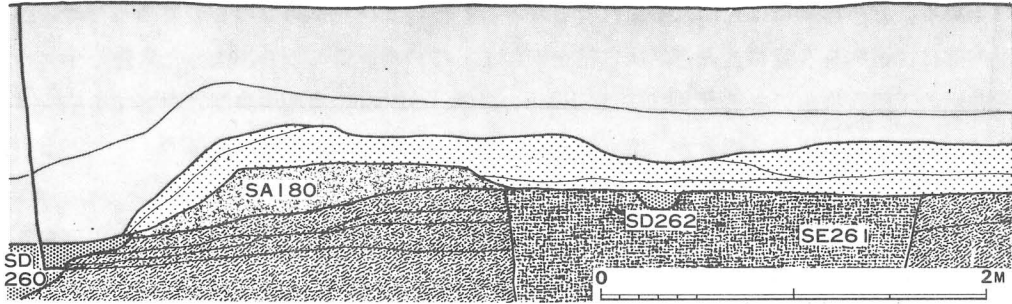
奈良時代以前の遺構として、古墳時代の土器を出土する土壌などがある。いずれも発掘区西寄りの地山土が高く残存する部分で検出した。中央南発掘区の西端では、SK015・016が、中央発掘区SB008の西側ではSK034がある。さらに、北発掘区下層でSX037を認めた。SX037は、工事着手後の機械による掘削の際、土師器や須恵器が数多く出土することによって判明したものである。砂層中に堆積した黒色砂質土から多数の土器を発見したが、遺構の性格は明確でない。

2. 塔 地 区

塔地区の発掘調査は第2次・第6次調査でおこなった。検出した主たる遺構には塔とみられる基壇建物1棟・寺域の南を限る大垣1条・掘立柱建物1棟・井戸4基・土壌6などがある。他にも建物としてまとまらない小穴が多数あり、中には古墳時代の土器を包含するものが若干存在する。また、小さな川の流路の一部も検出した。

遺跡の層位は、基本的に上から厚さ50～60cmの工事用盛土があり、次いで耕作土（黒色土）、床土（褐色土・灰色砂）がある。床土の下は暗褐色土があり、遺構はこの上面から切込まれている。この下には黄褐色粘質土や灰褐色砂質土が部分的に存在し、地山土に至る。遺構面をなす暗褐色土の下がすぐ地山土になる部分も多い。記述に際しては、第2次発掘調査地を西発掘区、第6次発掘調査地を東発掘区と呼ぶ。

塔 西発掘区中央部西寄りで塔とみられる基壇建物（SB050）を検出した。基壇築成前におこなわれた掘込み地業の痕跡を検出したのみで、基壇そのものは削平されて残存していない。掘込み地業の平面形は正方形にならず、東西南北の各辺がそれぞれ6.2m、6.0m、6.0m、5.6mとなり、北辺が短い。南北両辺の中央は、北辺で一辺60cmの方形に、南辺で東西2.2m南北30cmの長方形に張出しがみられる。掘込み地業は暗褐色土上面から約70cmの深さを持ち、砂と粘土に瓦片や礫を混え6～7層にわけて地業としている。基壇化粧石は全く残存していないが、掘込み地業西南隅付近に散布する凝灰岩片があるいは基壇化粧に用いられたものかも知れない。掘込み地業の周囲には多くの土壌がみられたが、掘込み地業と重複関係にある土壌はSK049を除きいずれも掘込み地業以前のものであることが判る。



第7図 SA180 南面築地土層図

南面築地 寺域の南を限る築地（SA160）を東発掘区南端で検出した。SA160の上部はすでに削平されていたが、緻密な黄褐色粘土の高まりがみられ、築地の位置を確認することができた。築地基壇は、幅約3m（10尺）の規模をもち、暗褐色土の下にある地山面にその基底部をおいている。基壇中央部には幅約1.7m（6尺弱）の高まりがあり、これを築地本体とみることができる。築地基壇の最下部には瓦が少量含まれていた。SA160の南北両側で、築地にともなう溝を検出した。北側の溝（SD262）は、幅約20cmの小規模なものであるが、南側の溝（SD260）は幅80cm以上、深さ40～50cmの規模をもつ。SD260の溝幅については、発掘区外におよぶため正確な数値を知ることができなかった。SD260には多量の瓦片を含んだ灰褐色混砂粘質土が堆積しており、溝が一条条間路の北側溝で、西隆寺造営以前からこの位置に存在した可能性も推測される。

掘立柱建物 SB040は東西両発掘区の北辺で検出した7間×3間以上の東西棟の掘立柱建物である。南面に廂を付し、おそらく北面にも廂を設けていたものと推測できる。柱間寸法は、桁行梁行とも3m（10尺）をはかり、廂では梁行2.65m（9尺）と狭くしている。柱穴は一辺0.8～1.2mの隅丸方形の平面をもつものが多く、黒褐色土を埋め土とする。柱拔取痕跡はないが、柱根の残存もみられなかった。SB040掘立柱建物の時期については、遺構に重複関係が少なく、遺物も伴わないので不明であるが、ただ後述するSE060井戸との位置関係から西隆寺造営以前の遺構であるとみられる。

井戸 東西の発掘区で各2基の井戸を検出した。SE055は、西発掘区SE060の西南に検出した井戸である。井戸は径2m弱、深さ約1mの平面円形の掘りかたをもち内部に一辺約60cmの縦板組の井戸枠が残存していた。井戸枠は最下部しか残っていなかったが、四隅に杭状の隅木を打込み、横棧をわたして固定するとともに縦板を支えている。井戸内部から遺物は出土せずSE060との時期関係は不明である。

SE060は西発掘区中央部東寄りに存在する井戸である。井戸掘りかたは南北径約2.8mの不整楕円形平面をもち、東半部は発掘区域外に擴がる。井戸には縦板二段組みの井戸枠が残存していた。これは長さ1.7m、幅0.3m前後の桧板を3～4枚連ねて一辺とし、さらに中ほどで重ねて二段に構成している。縦板は40～50cmの間隔で四段に組まれた横棧で内側から支えら

Ⅲ 遺 構

れている。井戸枠木には仕口穴や釘穴などがみられ他の部材を転用したものであろうか。井戸内部には遺物を多量に含んだ黒灰色粘土がつまっていた。ここから出土した遺物の年代から井戸の下限が推定できる。SE060はSB040の南側、SB040の東西中央間に対応する位置にある。この位置関係から両者が、奈良時代前半すなわち西隆寺造営前の遺構であることが判る。

SE261は西発掘区西南端付近で検出した井戸である。径2.2m前後、深さ1.8mの円形掘りかたをもつ、西半は発掘区域外に擴がる。井戸枠は、四隅に隅柱をたて横棧をわたして、縦板を支える構造で一辺約90cmの規模をもつ。井戸を埋めた土層から奈良時代前半の土器片や木器などが出土した。

SE279は、SB040の東端南側で検出した井戸状の遺構である。径3.5m前後の円形掘りかたがみられるが井戸枠は検出できなかった。内部からは奈良時代前半の遺物が少量ながら出土した。

土 壙 西発掘区で検出したSB050の周辺には4つの土壙（SK046～049）がある。このうちSK046～048は、SB050の掘込み地業と重複関係があり、土壙の方が古いことがわかる。SK049は逆にSB050を切って作られ、これらの中では最も新しい遺構である。土壙の規模は、SK048が一辺約4.2mをはかりやや大型である以外は径1～1.6m、深さ30cm程度の小型のものである。土壙内から遺物は出土せず、いずれも性格はわからない。

SK292は東発掘区北端、SB040東妻柱穴の西側で検出した円形の土壙である。径2mの掘りかたをもち内部から奈良時代前半の遺物が多数出土した。SK292の位置はSB040の内部にあたり、両者の関連が問題になるが、直接に遺構が重複せず出土遺物からみるとほぼ同時期と考えられ、その前後関係は決し難い。

溝 西発掘区で3条、東発掘区で1条の溝を検出した。この他にも、後世の耕作に関連すると思われる南北や東西方向の小さな溝状の遺構を検出した。

SD044は、西発掘区西北部から南へ蛇行する幅30～50cm、深さ20cmほどの素掘りの溝で、暗褐色土下面の黄褐色粘質土から切込まれている。溝内には暗褐色粘質土が堆積し、弥生式土器片、古墳時代の土師器片、埴輪片が含まれていた。

SD045は、西発掘区北西隅から南東に伸びて南西へ鈎の手に折れ曲る素掘りの溝である。黄褐色粘質土上面から切込まれており西隆寺以前の溝であることが判る。溝は幅50cm、深さ20cm前後である。SD044とSB040と重複関係にあり、これらの中ではSD045が最も古いことがわかる。

SD061は、SE060の南側から南西へ伸びて東南へ折れ曲る素掘りの溝である。溝幅は30～80cmで東南方へ曲折して幅が広がる。深さは10cm程度の浅い溝であり、遺物は含まない。なお東側発掘区南端で東西に走る溝SD260を検出した。この溝については、すでに南面築地(SA160)の項で記述しているのでここでは触れない。

その他の遺構 SB040・SB050の南側、SA160に至る間には、小穴が多く認められるが

遺構の性格は不明である。むしろ SA160・SD262 の北側約 20m 間に明確な遺構が存在しないことは、奈良時代を通して、この部分が空閑地として意識されていたものと考えられる。

3. 金堂地区

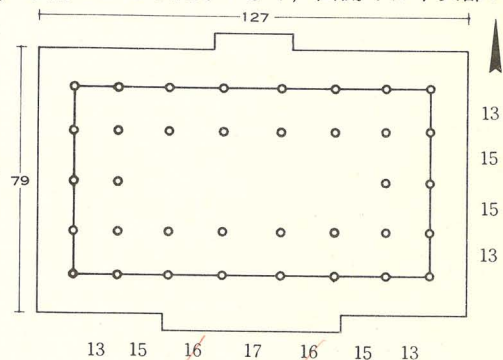
金堂地区の発掘調査は、第 3 次調査でおこなった。検出した主たる遺構には、西隆寺金堂と西隆寺造営以前の掘立柱建物 7 棟、井戸 4 基、溝 4 条、道路 1、堀 1、池 1 などがある。

調査地域は水田であり、耕作土（厚さ 18cm 前後）の下に床土（厚さ 10cm 前後）がある。床土の直下が褐色あるいは暗褐色土の遺構面となり、金堂およびそれ以前の遺構がともに暗褐色土上面から検出できた。

金堂 発掘区中央から金堂基壇（SB100）を検出した。基壇は後世に著しく削平され、積土を残存しないが、凝灰岩切石列および、溝状をなす切石拔取り痕跡などから、金堂基壇の位置と規模を知ることができた。凝灰岩切石列は、基壇東南部と西辺部で比較的良く残っていた。切石はほぼ原形をとどめるもので長さ 97cm、幅 27cm、厚さ 7cm をはかる。この切石については、地覆石とするよりも延石と考えた方が妥当であろう。それは、地覆石が一般的に約 30cm の厚味を持つこと、基壇東南隅部でみられるように、切石列が周囲の遺構面よりも 5cm ほど低いことなどの理由による。延石を抜取った痕跡は、幅 0.6～1m、深さ 10cm の溝状をなし、内部に凝灰岩片を多く含んでいる。凝灰岩片の散布は抜取り痕跡の外方にもおよんでいる。延石列などによって方形に画された部分が金堂基壇であるが、基壇土の残存はなく、また金堂造営前の遺構がさほど削平されていないことからみて、基壇築成の際に掘込み地業はおこなわれなかったようである。

金堂基壇規模は、延石外面間で東西 38.13m、（約 127 尺）、南北 23.7m（79 尺）となる。正面中央には東西 15.9m、南北 1.5m、背面中央には東西 7.6m、南北 1.5m の張出し部がみられた。おそらく、正面中央に柱間 3 間分、背面中央に柱間 1 間分の幅をもつ階段が設けられていたものと推測できる。両側面の階段については、東側には全く痕跡がなく、西側では中央部に大きな凝灰岩片を多数検出したが、明確な階段遺構を認めることはできなかった。基壇の正面東側では、平瓦や礫を敷いた舗装面が部分的に認められたが、これが正面のみか、基壇四周に敷いていたのかは明らかでない。なお雨落溝は検出されなかった。

今回検出した遺構から金堂建物を復原してみよう。基壇の南北長と東西長の比率は 1 : 1.61 を示し、奈良時代における最も基本的な



第 8 図 金堂復原平面図

Ⅲ 遺 構

建物形態である7間・4間の基準比率内に入る。このことから、正面7間、側面4間の建物の可能性が考えられる。正面と背面にみられた階段の痕跡から桁行方向の柱間を復原すると中央間17尺、次いで16尺・15尺、廂部分が13尺に割付けられ、桁行総長31.5m(105尺)となる。基壇東西長が38.1m(127尺)であるから両側に各々11尺あまることになる。梁行方向の柱間については、廂部分を13尺とし、身舎部分を15尺とすると梁行総長16.8m(56尺)となり、基壇南北長に対して23尺あまることになる。このように西隆寺金堂建物は、桁行7間・柱間総長31.5m、梁行4間・柱間総長16.8mに復原できる。この金堂を他の平城京内寺院の金堂と比較すると、大安寺の118尺×60尺より1廻り小さく、唐招提寺の94尺×48尺より1廻り大きいこととなる。

掘立柱建物 SB100と重複して7棟の掘立柱建物を検出した。7棟の建物はいずれも西隆寺造営以前の遺構である。

SB085は、SE080を覆う1間×1間の建物で、井戸屋形とみられるもの、柱間寸法はいずれも2.3mをはかり、建物方位は実測方位に対して北で東へ10°振れている。柱穴は0.4×0.45mほどである。

SB120は、SD110Aの西側に検出した4間×2間の東西棟建物である。SB125・SB155・SD110Bと重複関係にあり、ともにSB120が先行する。柱間寸法は、桁行2.1m、梁行2.5mをはかり、方位は北で東に1°52′振れている。柱穴は0.55×0.5mほどである。

SB125は、SD110Bの西側にある3間×2間の南北棟建物である。SB120と柱穴が重複し、SB120よりは新しいことが判る。柱間寸法は、桁行各1.95m、梁行各1.5m、をはかり、方位は北で東に0°40′振れている。柱穴は0.3×0.3mほどである。

SB135は、SE130の北側にある3間×2間の南北棟建物である。柱間寸法は、梁行が1.0m、桁行は一定せず1.2mないし1.5mであり、方位は北で東に47°43′と大きく振れている。柱穴は0.4×0.4mほどである。

SB150は、SE080の北側にある。2間×2間の南北棟建物である。柱間寸法は、桁行2.5m、梁行1.5mをはかり、方位は北で西に43°04′と大きく振れている。柱穴は0.6×0.6mほどである。

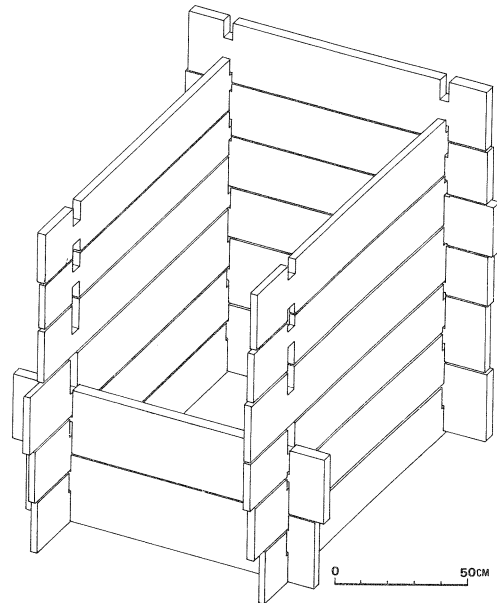
SB155は、SB120とほぼ同位置にある3間×2間の東西棟建物である。SB120とSD115と重複関係にあり、SB120よりは新しくSD115より古いことがわかる。柱間寸法は、桁行梁行ともに1.55mをはかり、方位は北で東に1°52′振れている。柱穴は0.6×0.5mほどである。

SB157は、SE080の北側にある3間・2間の南北棟建物である。SE080と重複し、SB157の柱穴が井戸掘方で切取られている。柱間寸法は、桁行1.3m、梁行1.15mをはかり、方位は北で西へ1°35′振れている。柱穴は0.4×0.4mほどである。

井戸 金堂地区の調査で、ほぼ東西に並んで3基、やや北寄りに1基の計4基の井戸を検出した。いずれも、西隆寺金堂以前の遺構である。

SE075は、最も東側で検出した井戸で、水田畦畔下にあるため、掘りかたの東半部を若干認めたにすぎない。井戸掘りかたは 3×2 mの隅丸方形を呈す。井戸枠の残存はない。

SE080は、金堂地区東側にある井戸で、上部で東西2.4m、南北1.9m、下部で東西1.45m、南北1.9m、深さ1.7mの掘りかたをもつ。内部には横組の井戸枠が2段分残っていた。井戸枠は、四隅に杭を打ちその外側に沿わして桧板（長さ1.7、幅1.0、厚さ0.1m前後）を太枅を用いて横に積み上げている。井戸を埋める土の中から木簡や土器などの遺物が出土し、その年代からみて西隆寺造営時に埋められたものであろう。なお、井戸の上には上屋(SB085)が作られている。



第9図 SE130 井戸枠組図

SE090は、発掘区中央部にある井戸で、井戸枠はすべて抜取られていた。抜取り穴は、東西2.1m南北1.7mの隅丸方形を呈し、深さ2.5mをはかる。抜取り穴を埋める土から土器が多量に出土し、その年代から天平末年頃に埋められたことがわかる。

SE130は最も西側で検出した井戸である。井戸掘りかたは、上部で東西2.35m、南北1.8m、下部で東西1.5m、南北1.1m、深さ2mの規模をもつ。内部には長方形の板材を井籠に組んだ井戸枠がみられた。井戸枠は一辺0.8mをはかり、6段分をとどめる。枠板の組み方は、材の両端に相欠きの仕口を作り、太枅を使用せず積み上げている。内部からは、須恵器大甕や井戸ツルベに用いたとみられる土師器甕などが出土した。

溝 発掘区中央部で南北に走る溝2条を認めたほか、井戸や池にともなう溝を検出した。いずれも、西隆寺造営以前の遺構である。

SD095は、発掘区中央東寄りで検出した南北溝であり、SD095AとSD095Bの2時期に区分できる。SD095Aは、溝幅0.7～1.0m、深さ0.3mをはかり、のちに西方へ幅を拡げてSD095Bとなる。SD095Bは、幅2.5～2.8m、深さ0.3mをはかる。いずれも護岸の施設はなく、素掘りの溝である。溝底は南へ下がっている。

SD110は、発掘区中央西寄りで検出した南北溝であり、SD095と同様にSD110A・Bの2時期に区分される。SD110Aは、溝幅1.5～1.8m、深さ0.3mをはかり、のちに幅を拡げてSD110Bとなる。SD110Bは、幅2.4～2.8m、深さ0.2mをはかる。溝はSD095と同様に南へ流れる。

SD115は、SD110Bと後述する池(SG140)とを結ぶ東西溝である。溝幅は一定せず西側では1.7m、東側では0.7mをはかり、しだいに東へ幅を狭めている。溝底は東へ下がり、SG1

Ⅲ 遺 構

40の水をSD110Bに落したものである。溝はSB120, 155の柱穴を切って作られ、これらより新しいことが判る。

SD145は、SE130の西に接する東西溝である。溝肩に出入があり幅は一定しないが最大3.0m, 最小1.4mをはかる。溝底は西へ下がり、SE130の水をSG140に落すものであろう。

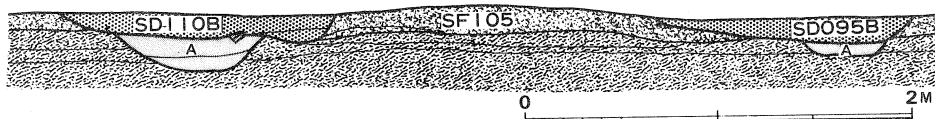
道路 発掘区の中央部には、東をSD095, 西をSD110で区画された南北に細長い地帯(SF105)がみられる。柱穴や土壇状の遺構はほとんどみられず、平坦面となっている。SF105の性格については、まず築地とも考えたが、築地寄柱や積土の痕跡がないうえ、幅が4m近くなることから可能性は小さく、むしろ両側に溝をとまう道路とした方が妥当である。SD095AとSD110Aを側溝とする道路は、路面幅5.6m, 両側溝心心距離6.6m(2.2丈)である。SD095BとSD110Bを側溝とする時期になると、両溝とも西へ拡がり、路面幅が3.5~4.0mと狭くなる。これに伴って、道路心の位置が若干西へ移動し、また両側溝心心距離も6.0mと若干狭くなることになる。SF105の中軸線はSB100の中軸線とほぼ一致し、この道路が平城京右京一条二坊十坪と十五坪間を通る小路である可能性が大きい。ただ平城宮朱雀門との距離を計ると若干問題も生じる。このことについては後述するのでここでは触れない。

塀 SD095の東側にそって南北方向の柱穴列(SA156)を検出した。SA150はSD095Aの東肩から東へ2.95m(約10尺)の位置にあり、6間分を検出したが両側ともさらに発掘区外に伸びる。柱間寸法は一定せず2.1m~2.7mとばらつく。柱穴は0.4mほどであり、方位は北で西へ1°35'振れている。SD095・SF105と坪内を区画する機能をもつ塀であろう。

池 発掘区の西端で大きな池状の溜り(SG140)を検出した。規模は南北9m, 東西5m以上、深さ0.25mであり、西側は発掘区外に拡がる。池の水は東南隅からSD115を経て、SB110Bに流出する。

中門・回廊・講堂発掘区 金堂の調査と平行してその周辺に存在するとみられる中門・回廊および講堂を確認するため、若干の発掘区を設けた。中門を追求した発掘区では、地表下0.4mで部分的に瓦を敷いた面を検出し、さらにその下で径1.7mの円形掘形(SX150)を認めた。しかし中門遺構を確認するには至らなかった。SB100の東に回廊を追求する目的で設けた発掘区では、大形の土壇(SK070)を検出したのみで回廊遺構は検出できなかった。SB100の北方に講堂を追求する発掘区を設けたが、小溝を認めたにすぎず、講堂はさらに北方に存在するものと考えられた。

前述した各種の遺構のほか、建物にまともらない柱穴状の穴や、土壇状の遺構が無数に存在する。時期的には西隆寺造営以前のものであるが、性格などについては不明である。



第10図 SF105 小路, SD095・110 側溝土層図

4. 金堂南地区

金堂南地区の発掘調査は、第4次調査でおこなった。検出した主たる遺構には、寺域の南を限る築地1条・堀1・溝3条・土壇3などがある。この他に回廊の痕跡ともみられる積土や大小多数の土壇状の遺構がある。なお南面築地については、塔地区の第6次調査で一部を検出している。

調査地域は水田面をとどめており、耕作土の下に灰色砂質土の床土と遺物を含む黄褐色土がある。西隆寺に関連する遺構は、この下の褐色あるいは暗褐色土の上面で検出できた。それ以下には古墳時代の遺物を若干含む褐色砂があり、黄色粘土の地山土に至る。西隆寺に関連する遺構が切込む暗褐色土には、奈良時代前半の土器片が含まれることから、これを西隆寺造営に関連した整地土とみることもできよう。

南面築地 発掘区南端で東西に走る築地(SA160)を検出した。遺構はかなり削平されていたが、暗褐色土上に積み上げられた茶褐色粘土の高まりが認められ、築地基壇の存在が判明した。築地基壇には掘込み地業はみられない。基壇上にのる築地本体については、削平や攪乱をうけて不明である。築地基壇の北縁には、築地と平行して東西に走る雨落溝(SD161)がある。溝は幅0.8m、深さ0.2mの規模をもち、灰褐色砂質土が溝を埋めていた。SD161には一部ではあるが、石の抜取り痕跡がみられ、本来この溝が石敷であったことを推測させる。SD161と対応する築地南雨落溝については、今回の調査で確認することができなかった。ただ今回の調査で最も南まで発掘した東南隅部分では、北雨落溝南縁から南へ3.2mある。築地基壇幅を第6次調査で確認した規模で考えると、検出できてよいはずである。発掘区南端へは茶褐色粘土がしだいに高まりつつ遺存していることからしても、溝が削平をうけてしまったものとは考えられない。多少の疑問が残るが、北雨落溝の位置が、第6次調査で検出したそれとほぼ等しい位置にあることから、ここではこの粘土の高まりを南面築地としておく。

堀 SA180は、発掘区中央部西寄りで検出した南北方向の柱穴列である。柱穴は径0.8m前後の隅丸方形をなし、柱間寸法3.3mをはかる。調査では2間分が検出できたにすぎない。南側の2柱穴には柱根が遺存していた。SA180がさらに南と北へ伸びるものか、あるいは発掘区の西へ折れて掘立柱建物にまとまるのかについては不明である。

溝 北端で2条の溝を検出した。SD191は、発掘区北端で検出した東西溝である。溝は幅0.4m、深さ0.1mの小規模なもので、内部には灰白色砂が堆積し、土器片や瓦片も含まれていた。SD192は、SD191の南側に接して検出した東西溝である。溝は幅1m前後、深さ0.3mの規模をもち、溝底は東へしだいに下がる。内部には暗褐色砂質土が堆積し、土器片が含まれていた。SD192は西側で南へ折れるが、南への延長部は、土壇(SK166・173)などによって破壊されている。SD191・192から出土した遺物は、いずれも奈良時代後半の時期のものであり、これらの溝が西隆寺に関係した遺構であることがわかる。

Ⅲ 遺 構

土壇 発掘区中央部には大小の土壇がある。SK166は、SD192の南折部分にあり、溝を切込んで掘られている。南北2.6m、東西2m、深さ0.5mの規模をもつ。SK166の中央部は一段深くなり、上部に多くの瓦片を含んでいた。

SK174は、発掘区中央部東寄りで検出した土壇で、南北6.3m 東西4.5m、深さ0.4mの規模をもつ。土壇内には灰褐色土が堆積し、多量の瓦片が含まれていた。

SK175は、SK174の南にある土壇で、南北7.5m 東西5m、深さ0.4mの規模をもつ。土壇内には灰褐色土が堆積し、内部から二彩や縁釉皿などの破片をはじめ瓦片が数多く出土した。

これらの土壇から出土した軒瓦の大多数は西隆寺に使用したと思われる6235-C・6761型式である。また、土壇はいずれも暗褐色土面から掘込まれているところから、土壇の年代を奈良時代末か平安時代初め頃におくことができる。

その他の遺構 SD191の北側には、暗褐色粘質土の高まりがみられ、位置的にみて、SD191を南雨落溝とする回廊基壇(SC190)の存在が考えられる。ただ今回の調査範囲が狭いうえに、遺構の残存も悪く断定することはできない。その可能性を指適するにとどめたい。

前述した各種の遺構のほか、建物にまともでない柱穴状の穴や、土壇状の遺構が多くある。時期的にも西隆寺以前のものや以後のものがあるが、いずれも遺構の性格を明らかにすることはできない。

5. 寺域西北地区

寺域西北地区の発掘調査は、第5次調査でおこなった。検出した主たる遺構には、掘立柱建物3棟、井戸1基、土壇2、溝11条などがあり、この他に小溝や小土壇などがある。

調査地域は、旧校舎撤去後の空地で、すでに山砂の盛土整地がなされていた。盛土下には厚さ10cm前後の旧耕作土と厚さ25cm前後の床土層（灰色砂質土、茶褐色土）があり、暗褐色土に至る。暗褐色土は厚さ約20cmで、その下が黄褐色地山土となる。遺構は暗褐色土層の中から切込まれていたが、多くは暗褐色土層下部、地山土上面近くで確認できた。

掘立柱建物 SB200は、発掘区南端で検出した1間以上×3間以上の南北棟掘立柱建物であり、西面に廂がある。柱間寸法は、身舎・廂とも同じで、桁行2.7m（7尺）、梁行3m（10尺）をはかる。柱穴は1辺0.8～1.0mの隅丸方形の平面をもち、うち2つに柱根が残存していた。SB201と柱穴が重複している。

SB201は、SB200の北側で検出した3間×3間の総柱建物である。柱間寸法は、いずれも1.5m（5尺）をはかり、建物方位は北で西に約9°40'振れている。柱穴は不揃いで隅丸方形や橢円形のものがある。柱根跡がみとめられ、柱を抜きとった痕跡はない。SB201は、SB200と重複関係にあり、SB201が古いことがわかる。

SB202は、発掘区中央部北寄りで検出した3間×2間の南北棟建物である。柱間寸法は桁

間、桁行とも1.8m（6尺）である。柱穴は60cm前後の隅丸方形ないしは惰円形を呈している。柱痕跡がみられ、柱を抜きとった痕跡はない。

井戸 SE203は、SB202の東南隅に近接して検出した井戸である。井戸は径1.4m、深さ1.6mの平面円形の掘りかたをもち、内部に一辺約80cmの縦板組の方形井戸枠が残存していた。井戸枠は四隅に角材の隅木を打込み、それに横棧をわたして縦板を支えている。縦板4～5枚で1辺をなし、横棧2段分が残存していた。井戸を埋める土層から出土した遺物からみて、西隆寺造営以前に廃絶したものである。

土壌 発掘区西壁南寄りで2つの土壌を検出した。SK210は、南側で検出した土壌で、南北7.5m、東西1m以上の規模をもち、深さ20cm以内の浅いものである。内部には土器片と瓦片を多く含む暗褐色土が堆積していた。SK210の西半は発掘区外に広がる。

SK221は、SK210の北側で検出した土壌であるが、東端の一部を調査したにすぎない。南北2.5m、深さ15cmの規模をもち、内部には黒褐色土が堆積している。遺物の包含は少ない。

溝 発掘区の北西部から南東部へ斜めに走る細溝（SD204～209）が6条ある。いずれも幅30～40cm前後、深さ10cm前後の規模をもつ。内部には暗褐色砂質土が堆積するが、遺物については土師器の細片を含む程度である。SB202をはじめ数個所で他の遺構と重複関係にあるが、いずれも斜行溝の方が古い。SD204～209の溝の方位は北で西へ約11°20′振っており、SB201と比較的近い方位をとるが、これらが同時期の遺構か否かについては確証がない。

発掘区北端で東西に走る溝（SD216～220）を5条検出した。いずれも幅80～40cm、深さ10cm内外の細溝である。SD208・209との重複関係からSD217がより新しい遺構であることが判明する。SD218～220については時期や性格など不明な点が多い。

その他の遺構 前述した遺構以外に、建物にまともでない柱穴状の遺構や、土壇状、溝状などの遺構がある。小穴が5～6個群在する部分もあるが、これらの遺構の性格については不明であり、時期についても明確におさえることができなかった。